

新たな言語教養のために

立花 英裕

1. 外国語教育に携わる者たちの連携は可能なのだろうか。
 - 1) 今何よりも求められるのは、外国語を学ぶ意義についての共通認識である。外国語をめぐる教育観が共有されにくくなっているとするれば、それは、制度的な機構や教育方法が新たな状況に対応しきれなくなっているためである。社会的なコンセンサスが英語重視に傾きすぎていることもある。経済・社会構造の変動と情報の進行、さらにはアジア情勢が日本の言語環境に変化をもたらしている。
 - 2) グローバル化においてあまり注意を払われていない現象に、広範な文化的・社会的異種混淆がある。言語の多様性を、文化的差異だけでなく、異種混淆の面からも考える。

2. 外国語教育に日本語は関係ないのだろうか。
 - 1) グローバル化の時代は、日本語を位置づけ直すことを要求している。特に社会的行為の主体としての母語使用者という角度から問題を取り上げる。
 - 2) グローバル化時代の言語意識 a:
外国語を学ぶことは母語を話すことをやめることではない。言わずもがな、かもしれないが、これを言い換えるなら、世界のどこにおいても必要に応じて日本語を用いる権利があるということである。このような確認は決して無意味ではない。例えば、大学ランキングに関連づければ、日本語による学問研究が、英語による学問研究よりも低く見られていだろうか、という問いにつながる。強力な媒介言語である英語以外の諸言語を母語とする人たちに対して、どのように対応すべきだろうか、という問いとも、それはリンクする。他の言語と共に日本語を考えるなら、それまで見えなかったことが見えてくる。
 - 3) グローバル化時代の言語意識 b:
日本語は、それを母語としている者たちの占有物ではない。世界の多様性を構成する一つの財であり、誰もが利用できる。日本語は、それを学んだ者全ての財である。外国語教育は、日本語を他者と共有する意識を育むものでなくてはならない。互いの言語を学ぶという姿勢から、他の諸言語との連携の可能性が開けてくる。

3. 本当に英語以外の言語を学ぶ意義があるのだろうか。
 - 1) 日本では、外国語技能を観念的に捉え、言語の人間的・社会的側面を軽視してきた。次のような漠とした社会的風潮が見られる。
 - ① 英語以外の言語の学習に意義を見出さない。
 - ② 英語以外の言語を普遍性のない言語と見なしがちである。
 - ③ 英語を話さない人を非文明的と見なしかねない。
 - ④ 自分が日本語話者であることを忘れて、英語圏以外の文化を本質的にエグゾティシズムやフォークロアの対象とする。
 - 2) 本発表では、多様性や異種混淆の視点から、以上の諸点を具体的な事例にできるだけ関連付けて考えてみる。言語状況の共通認識が、諸言語連携の方向を教えてくれるだろうと期待したい。
 - 3) JACTFL は、社会にメッセージを発する機関であるべきだ。

(早稲田大学)